

論文内容の要旨

| | | | |
|--|--|----|-------|
| 専攻名 | 多文化社会学 専攻 | 氏名 | 川添 明子 |
| 題名 | <p style="text-align: center;">中学校期における英語発信能力の育成 ー英作文表現の効率化に向け、語彙がもつ「コア・イメージ」 を活かした語彙指導・文法指導の実践ー</p> | | |
| <p>論文内容の要旨</p> <p>本研究は日本の英語教育における課題である「英語発信能力」の育成を目指し、中学校期における生徒の英作文創出につながる語彙指導・文法指導、およびその定着を図る指導の効果について報告するものである。語彙指導における課題は、英単語と日本語の意味を1対1の関係で指導すること、文法指導における課題は、生徒にとって納得できる説明なく、文法項目の暗記を促す指導である。教師による演繹的で明示的な従来型の指導を見直し、第2言語習得モデルに基づいた帰納的で暗示的な「認知力活用型アプローチ」による指導を実践し、その有効性を検証している。認知力活用型アプローチとは、生徒の「気づき」と語彙がもつ「コア・イメージ」を活かした指導方法を指す。佐藤・田中（2009）は、「コア・イメージ」を「本来持つ中核的な、文脈に依存しない意味」と定義し、この意味に結びついた語彙項目・文法項目の理解が様々な文脈において適応可能であると指摘する。近年、ラジオ等の英語学習関連のメディアにおいても注目されるコア・イメージを活かした語彙・文法の指導を、中学校の授業で実践し、その有効性を検証する本研究は、英語教育にとって意義ある取組であると思われる。</p> <p>リサーチクエストンとしては「生徒に語彙がもつコア・イメージへの気づき・理解を促し、その理解されたコア・イメージが英作文表現への応用につながるか」と設定し、語彙・文法指導においてコア・イメージを効果的にとらえさせるための手立てを事例的に検討、実践した。語彙指導における調査項目は、英文の義務的要素である動詞である。教科書分析ならびに学習者コーパスである JEFLL（投野, 2018）分析から明らかになった「人を主語とする文」に偏って動詞を提示する従来の方法に対し、英語らしさを特徴づける無生物主語文によって動詞を追加提示する手法を講じた。逐語的で限定的だった動詞の意味と用法の理解を改善することをねらいとしている。また文法指導における調査項目は、中島（2017）に基づく、準動詞である不定詞・動名詞の名詞的用法における使い分けである。その使い分けについて生徒側から見るとしっくりこない説明に終始する従来の方法に対し、調査授業では不定詞 to には前置詞 to、動名詞 ing には現在分詞 ing と、関連する既習事項を系統立てて提示する手法により、文法機能が拡張してもそれぞれのコアのイメージが用法に息づいていることに気づかせ、文脈による使い分けの目安に気づかせることをねらいとしている。</p> | | | |

| | |
|---|-------|
| 氏名 | 川添 明子 |
| <p>調査方法としては、語彙・文法指導ともに上記の手法に基づく授業を実験群（中学3年生 33名）に行い、授業の前後にはテストと意識調査を実施した。また、授業を受けていない統制群（同学年生徒 33名）にも同じテストを実施した。事前テストは従来型の指導による動詞・準動詞の理解度を把握し、発展的な内容の事後テストは認知力活用型アプローチによる指導から得られた動詞・準動詞の理解度・応用度を把握するものである。指導方法の検証は、実験群による事後テストの結果が事前テストの結果を有意に上回り、さらに一定の期間経過後に実験群による遅延テスト（事後テストと同内容）の結果が、統制群による事後テストの結果を有意に上回る場合、理解度、応用度、定着度という点で、認知力活用型アプローチによる指導が従来型の指導よりも有効であるという示唆を得ることになると考えた。</p> <p>結果は、認知力活用型アプローチによる指導が英作文表現の効率化に有効であることが明らかとなった。具体的には、事前テスト・事後テストの順に語彙指導で 25.5%→67.8%（p 値<0.0001）、文法指導で 68.2%→86.5%（p 値=0.0004）と、いずれも p<0.01 と有意に上回ったことから、学習した語彙・文法に関する実験群の理解度・応用度が高まっただけでなく、強化指導がない状況でそれぞれ9カ月・6カ月が経過しても、その知識の定着度は統制群による理解度を、語彙指導で 54.0%→42.5%（p 値=0.042*）、文法指導で 72.9%→57.2%（p 値=0.002*）と、いずれも p<0.05 と有意に上回っている。知識理解の保持と持続性という観点からも、人間の身体感覚と連動させた学びであるこの新しいアプローチを英語教育に取り入れる重要性を示唆する結果となった。</p> <p>今回、仮説における「生徒の気づきと語彙が持つコア・イメージを活かした語彙と文法の指導が、英作文表現の効率化へつながり」までの検証はできたが、「英語発信能力の育成に寄与するのではないか」という、要は「生徒による文創出」（アウトプット）までの検証には至らなかった。今後は生徒に学習アプリによる発話訓練に取り組みさせる中で、研究を継続し発信能力の検証に努める。</p> | |